

# 発達障害の子どもを持つ保護者への ペアレントトレーニングに関する一考察

## A Study on parent training for parents with developmentally disabled child

西原 弘

NISHIHARA HIROSHI

### 要 約

平成 17 年4月に施行された発達障害者支援法により、発達障害児の早期発見・早期支援、発達障害者の自立及び社会参加が明文化され、各市町村は、保護者に対して相談・助言・紹介などを行うことが定められた。発達障害者の支援に際しては、家族も重要な援助者であるという観点から、発達障害者の家族を支援していくことが重要である。発達障害児の不応答や問題行動に対しての家族支援体制の一つとして、ペアレントトレーニングが近年注目されている。筆者が 2017 年に 3 つの拠点で行ったペアレントトレーニング講座を通じて、参加された保護者の子育てに対する悩みや、講座受講後の効果、保護者の意識の変化について調査を行い、ペアレントトレーニングのあり方について考察した。

キーワード：ペアレントトレーニング・発達障害・保護者支援

### 1. はじめに

平成 17 年4月に施行された発達障害者支援法により、発達障害児の早期発見・早期支援、発達障害者の自立及び社会参加が明文化され、各市町村は、保護者に対して相談・助言・紹介などを行うことが定められた。文部科学省及び厚生労働省は、「発達障害者支援法の施行について(通知)」(平成 17 年 4 月 1 日付け17 文科初第16 号厚生労働省発障第0401008 号文部科学事務次官・厚生労働事務次官通知)において、都道府県及び市町村に対し、発達障害者の支援に際しては、家族も重要な援助者であるという観点から、発達障害者の家族を支援していくことが重要であり、特に、家族の障害受容、発達支援の方法などについては、相談及び助言など、十分配慮された支援を行うよう求めている。

発達上の困難から子育ての難しさに悩みを抱えている保護者の支援が課題となっている。「言うことを聞かない」「ものを壊すなどのパニックを起こす」「叱ると暴れる」などといった子育ての上での困難さがトリガーとなり虐待につながりかねないケースが多い。筆者も児童相談所勤務時代に、「言うことを聞

かないときは子どもを叩いてその場を納める」といった話を母親から聴取するたび「それは虐待にあたりますよ」と指摘し、望ましい子どものとの接し方について助言指導を行ってきた。児童相談所における児童虐待に関する相談対応件数は年々増加の一途をたどっているが、児童虐待を受けた子どもの 54%が何らかの発達障害を有するという報告もある(杉山、2007)。家族形態が多様化する現在において、社会全体で障害のある子どもを支援することが求められ、子どもにとって一番そばにいる支援者である保護者への支援の充実がますます望まれている。

発達障害児(者)の家族に対する支援については、障害者総合支援法第 78 条第 2 項の規定に基づき、都道府県及び指定都市が地域生活支援事業の一つとして、「地域生活支援事業実施要綱」に沿って実施することができる「家族支援体制整備事業」(任意事業)がある。

家族支援体制整備事業は、発達障害児(者)の子育てへの相談・助言、発達障害児(者)の不応答や問題行動に対しての家族支援体制の構築を図ることを目的としており、同事業の主

な内容は、①ペアレントメンターの養成に必要な研修等(※ペアレントメンター：発達障害の子どもを持つ親であって、その経験を活かし、子どもが発達障害の診断を受けて間もない親などに対して助言を行う者) ② ペアレントトレーニングの実施 である。ペアレントトレーニング講座を実施する自治体数は、全国で 261 カ所(2015)と、前年の 231 カ所から増えてはいる(厚生労働省、2017)が、まだその数は不足している。

今回、筆者は 2017 年 6 月から 12 月にかけて、3 カ所の拠点でペアレントトレーニング講座を実施した。参加された保護者の子育てに対する悩みや、講座受講の効果、保護者の意識の変化について考察し、ペアレントトレーニングのあり方について考察する。

## 2. ペアレントトレーニングの実際

ペアレントトレーニング(以下、PT と表記)とは、発達障害の子どもを持つ保護者への支援の一つで、厚生労働省は、「発達障害者の親が自分の子どもの行動を理解したり、発達障害の特性をふまえたほめ方やしかり方を学ぶための支援」(厚生労働省、2015)と定義する。PT は、1960 年代に米国で応用行動分析(ABA)を基にした自閉症スペクトラム児への支援プログラムに始まる。知的障害を伴う自閉症スペクトラム児への療育における般化と維持を促進するために導入、発展してきた(井上、2012)。具体的には、ABA の考えを基に、保護者が子どもの課題となる行動の意味を知り、望ましい行動への変容に向けたアプローチの方法を保護者が学んでいくものである。PT 受講期間中は、学んだスキルを日常生活場面で我が子に対して実践し、うまくいった点やうまくいかなかった点を振り返り、指導者に助言を受けながら、実践力を高めていく。対象は、特に、注意欠如・多動性障害や自閉症スペクトラムの子どもとされ、不適応行動を減らし、適応的な行動を増やしていくかという点で効果をあげてきた。国内では、精研・奈良方式・肥前式、鳥取大学方式といった PT が実践されている。

筆者が実践している PT は、鳥取大学方式を基本としている。特定非営利活動法人アスペ・エルデの会が発行している「子育てが楽しくなる 5 つの魔法(改訂版)」(井上ら、2008)をテキストに使用する。このテキストのプログラムの目的は以下のようなものであり、子どもの行動理解や関わり方、適切な行動の教え方、他者への伝え方、そして親同士のコミュニケーションや仲間作りなどを狙いとしている。

[PT プログラムの目的]

1. 子どもの発達の状態を知ること。
2. 子どもとコミュニケーションを楽しめるようになること。
3. 支援の方法を人に伝える方法を知ること。
4. 子どもを成功に導く視覚支援や環境調整の方法を知ること。
5. 発達を促す適切な支援の方法を知ること。
6. 子育て仲間が増えること。

次表に、筆者が行っている PT の例を示す。この講座では、就学前幼児から小学校低学年までの発達障害の子どもを持つ保護者を対象としている。一度の講座の人数は 10 名以内とし、5 回の連続講座で構成されている。1 回 2 時間を隔週で行い、講義と演習を織り交ぜで行う。演習では、隣り合う保護者同士が話し合いながら進めていくワークを取り入れる。

第 1 回	レッスン ①「観察上手になろう」
第 2 回	レッスン ②「ほめ上手になろう」
第 3 回	レッスン ③「整え上手になろう」 レッスン ④「伝え上手になろう」
第 4 回	レッスン ⑤「教え上手になろう」
第 5 回	まとめ 「子どもの目標を設定してみましょう」

【表 PT「子育てが楽しくなる 5 つの魔法」プログラム】

プログラムの参加に関してはその目的、内容を理解していただき、全回を通じて参加できることを条件とする。事前に、子どものプロフィールについて伺い、簡易なアセスメントを行い、保護者の困り度を把握する。また、紹介する事例についても対象児の年齢群に合わせたものを提示し、イメージできやすいように工夫をしている。

講義・演習は、前述の「子育てが楽しくなる 5 つの魔法(改訂版)」子育て支援ワークブックに基づいて、「行動観察」「ほめ方」「環境調整」「伝え方」「課題分析」などの内容の講義やグループワークが行われるが、専門用語は一切使わず、平易な言葉に置き換えて説明している。特に行動課題については、ABA における機能分析(ABC 分析)ができるようになることを第一の目標とし、第 1 回目の講義・演習で力点を置く。また、行動課題の変容は適応行動の形成技法による環境調整と代替行動の教示を中心に行っている。

グループワークは、テキストに沿って課題を行い、隣り合う保護者同士が課題に対して意見交換を行い、全体での課題共有場面では、子どもの困り感に対して先輩保護者が「私も

同じ経験をして、「こう乗り切った」などの子育てに関する情報交換ができることを狙っている。また、前回の振り返りと家庭での実践について話し合う時は、うまくいったことは共有し、うまくいかなかったことについてはお互いで知恵を出し合うよう、参加者同士のコミュニケーションが取れるようにしている。このとき、進行調整に当たるファシリテーターのカウンセリング力と支援の知識や経験が大きく影響される。筆者は今年度の取組でペアレントメンターをサブファシリテーターに置き、グループワークでテーブルを巡回してもらった。メンターの体験談があることで参加者が事例を出しやすくなり、参加者同士で共感できる話題や受けられるサービス情報の交換もでき、次の支援リソースにつながるメリットもあった。

#### 1) レッスン①「観察上手になろう」

子どもの困った行動を理解するとき、まずは子どもの行動そのものを正しく知る必要がある。相談場面において保護者は「〇〇をして大変なんです」と話すことが多いが、困った行動そのものに目が向いてしまい、行動の持つ意味に気づかないことが多い。そのため、この回では「観察上手になろう」を目標に、①子どもの行動を具体的に説明できる ②子どもの行動の前後を考えることができる ③行動の前後を考えることで、子どもの行動の意味を知ることが出来る ことを目標とする。

例として、「宿題をしない」という行動を具体的に言い換えると「宿題をしないで、ゲームをする」など、「～しない」で終わらず、その時子どもがどうしているか分かるように説明できるようになる。

次に、機能分析について学び「行動の前後の状況を注意深く見る」ことで、行動のきっかけ → 行動 → 行動後の結果や対応 の3つに分割することで、子どもの行動の意味を考えるワークを行う。

#### 2) レッスン②「ほめ上手になろう」

よい行動を定着させるためには、ほめることが有効であることを学ぶ。親はどうしても子どもの悪い点だけに目が行きがちである。ほめるポイントはどこにあるのか。事例を通じて、普段叱ってしまいそうな場面でも、意外とほめるところがあることに気づいてもらう。「どこを直さなければ」と見るのではなく、「どこをほめようか」の視点で子ども見ること、子どもをほめる機会が増えてくる。ほめられると子どもはよりその行動を繰り返し定着につながる。ほめるところと叱るところが混在する場合、先にほめてから、「次はこう

しようね」と望ましい行動を教えることで、行動変容への意識付けを行うことを学ぶ。

次にほめ方のポイントを学ぶ。①よい行動をしたときにすぐにほめる ②子どもにわかりやすい表現で伝える ③子どもに合ったほめ方をする ④何がよかったのかを具体的に伝える の4点について事例を元にほめ方ワークを行い、理解を深める。

また、トークンシステムの活用法についても理解を深める。

#### 3) レッスン③「整え上手になろう」

よい行動を定着されるには、成功に導くための環境調整が必要である。発達障害の特性に合わせた環境調整の仕方について、事例を元にワークを行い、どこを工夫すれば集中できるのか、どのような支援をすれば見通しを持って諦めずに最後までやり遂げられるのかなどを考える。また、自分の子どもの特性を考慮した家庭環境のあり方について、工夫している点や改善したい点などを話し合う。

#### 4) レッスン④「伝え上手になろう」

発達障害のある子どもの特性の一つとして、相手からの言葉による指示が上手く伝わらない問題がある。親は一生懸命に何度も子どもに声かけをするが、子どもに上手く伝わらず、言われたとおりのことが出来ないと、親のストレスも大きくなる。発達障害のある子どもの特性を正しく理解し、伝え方のポイントを学ぶ。①前もって ②具体的に ③短く一つずつ ④注意を引いて ⑤絵や写真を使って ⑥わかりやすく ⑦約束する の7つのポイントを、事例を通して理解を深める。

#### 5) レッスン⑤「教え上手になろう」

課題分析について学ぶ。目標スキルを「ひとりでお風呂に入ることができる」としたときに、ひとりでお風呂に入るにはどのような手順を踏んで行うのか。何が出来て何が出来ないのか。出来ない時にどのような支援を行えばうまく前に進むことが出来るのか、について考える。

事例を通じて課題分析のコツを学び、参加者は今、我が子に支援を行っている課題について、行動を要素に分けてもらい、何が出来て、何が出来ないのか。出来ないポイントはどうすれば上手く前に進むのか、それともそこで行き詰まっているのかについて考えてもらい、グループ内で情報交換を行う。同じ目標スキルであっても、子どもによって要素の分け方にも違いがあることに気づき、普段

の子どもの行動を一つ一つ思い出しながら要素に分けることで、冷静に子どもの力を評価できる。また支援のポイントが具体化でき、どうすればいいのかについてピンポイントで考える視点を持つことが出来る。

6) まとめ「子どもの目標を設定してみましょう」

子どもへの上手な関わり方の 5 つのスキルを学び、まとめの課題として、我が子の支援目標を設定し、手続き作成表を作る。

複数の目標スキルが支援目標にあげられるが、取り組みやすい目標スキルを 1 つ設定する。手続きは次の通りとする。それぞれの目標スキルに①毎日続けられる取り組みか ②無理をせず、短時間で完了することが出来るか ③1~2 週間程度で達成できそうか ④子どもが自信を持って取り組みそうか ⑤親が楽しく取り組めるか(負担がない・イライラしない) の 5 つの視点で、できそうであれば 1 点、難しそうであれば 0 点とし、その合計点の高い目標スキルが教えやすい課題となる。

設定した目標スキルに対して、課題分析により行動を要素に分け、支援ポイントを明確にする。また、指導記録をつけ、支援の状況、成長の度合い、課題達成の目安、支援方法の変更等の判断等に利用する。

できた手続き作成表はグループ協議で発表し、自分が書いた手続きが、他人にも分かるものかどうか、もっとよい支援の方法があれば提案するなどの話し合いを行う。

3. 参加者の意識および受講効果について

今回、筆者は 2017 年 6 月から 12 月にかけて、3 カ所の拠点で PT 講座を実施した。参加された保護者の子育てに対する悩みや、講座受講後の効果、保護者の意識の変化について、アンケートを行った。3 か所の参加状況について述べる。

①第1拠点 A 市 B 区 n=10

B 区社会福祉協議会主催で行った。この拠点では、3 年連続 3 回目の講座開催である。受講者は、B 区の家庭児童相談員より紹介された 10 名である。8 名が区保健福祉センターにて相談を受けられ、PT 受講が親子関係の改善になることを期待して受講される。しかし、精神的に安定されていない親も複数おられ、全 5 回受講された方は 5 名であった。

②第2拠点 A 市 C 区 n=16

C 区保健福祉センター主催で行った。区の広報紙と障がい者地域自立支援協議会子ども部会を通じての広報を行った。受講者は放課後等デイサービスなどの利用事業者や小学校から情報をもらい申し込まれた方が多く、全体で 16 名である。これまでに、何らかの学習会や講演会を受講され、自ら学ぼうとする意欲的な方が多い。全員が全 5 回受講された。

③第3拠点 本学「ふれ愛ルーム 木のおうち」 n=5

本学内「ふれ愛ルーム 木のおうち」主催の地域貢献事業として実施した。主に行政機関・子育てに関する団体への広報紙による周知とホームページ上での告知を実施一ヶ月前より行った。開催時期が近づく頃より問合せが出てきはじめ、7 名の申し込みがあり、6 名が参加された。本学で行う情報の入手先は、子育てサークル内の SNS による情報やインターネットによる検索でたまたま見つけた、といった「情報を探しに行くことができる」積極的な方が多かった。冬場での実施のため、きょうだいが発熱等で欠席される方もあり、全 5 回受講された方は 1 名。あとは、1 回~2 回休まれたが、できる限り続けて参加される方がほとんどだった。

1) 受講前アンケートから

受講前にアンケートを行い、受講前の意識調査を行った。質問項目と結果は次の通りである。

- 設問 1. 講座開催の情報を何で知ったか
- 設問 2. 講座を受講するきっかけ
- 設問 3. 子育てに悩んでいる点
- 設問 4. 学習会等の参加経験
- 設問 5. 学習会等に参加しなかった理由
- 設問 6. 家庭における支援者は誰か
- 設問 7. 母親の相談相手は誰か

a) 設問 1. 講座開催の情報を何で知ったか (n=31)

1. 区・大学の広報誌	3	10%
2. その他情報誌	0	0%
3. 情報サイト	0	0%
4. ネット検索	1	3%
5. 区役所	10	32%
6. 学校園	9	29%
7. 放課後等デイサービス等事業所	4	13%

8. 家族・友人・知人	4	13%
9. その他	0	0

B区・C区とも、区役所が情報発信元となっているため、「区役所からの紹介」の割合が多い。また、本学での参加者のうち、3名はSNSによる情報での参加であった。区役所から紹介された32%の保護者は、何らかの関わりを区役所窓口と持っていたから情報を入手できたが、それ以外の方は学校や事業所からの紹介が42%である。合わせて74%の方は紹介を受けての参加となる。残りの26%は自ら情報を求めてたどり着いた保護者であり、「たまたまネットで検索していたら偶然見つけた」「子育て仲間のグループLINEで情報が流れた」「広報誌が目にとまった」という声が聴かれた。

b) 講座を受講するきっかけ (3つ以内選択の複数回答)

1. 課題に取り組めるようになってほしい	11	13%
2. 行動問題の低減	14	17%
3. 子どもの気持ちを知りたい	12	15%
4. 親の関わり方を変えたい	15	18%
5. 叱ってばかりでしんどい	11	13%
6. 自分が学んで、家族に伝えたい	6	7%
7. 子育てを楽しみたい	8	10%
8. 他の保護者と交流したい	5	6%
9. その他	1	1%

「親の関わりを変えたい(18%)」「行動問題の低減(17%)」「子どもの気持ちを知りたい(15%)」「叱ってばかりでしんどい(13%)」と、子育てのしんどさからの脱出を思っている参加者が多いと考える。

c) 子育てに悩んでいる点 (3つ以内選択の複数回答)

1. 何から教えてよいかわからない	6	7%
2. どこから教えてよいか分らない	7	9%
3. 子どもに合った教え方が分らない	22	28%
4. 拘りがきつく、指示が入らない	9	11%
5. 指示をすると癇癪を起こす	10	13%
6. 教えると、したがない	10	13%
7. 子どもがすぐに諦めてしまう	5	6%
8. 親が指導を諦めてしまう	3	4%
9. 子育て情報が不足している	3	4%
10. 相談できる人が居ない	4	5%

「子どもに合った教え方が分らない(28%)」「指示をす

ると癇癪を起こす(13%)」「教えるとしたがない(13%)」「拘りがきつく、指示が入らない(11%)」と、子どもの特性に合わせたアプローチが出来ずに困っている様子が見られる。

d) 設問4. 学習会等の参加経験

1. ある	18	58%
2. ない	13	42%

過去に学習会等に参加した経験のある保護者は約6割と多い。しかしながら、拠点①のA市B区では、参加経験者は2割で、家庭児童相談員から勧められた方はみな今回が初めての受講であった。

e) 設問5. 学習会等に参加しなかった理由(複数回答)

1. 情報がない	10	59%
2. 日程が合わない	3	17%
3. 会場が遠い	1	6%
4. 子どもを預けられない	2	12%
5. 関心がなかった	1	6%

複数回答での集計であるが、設問4.で「ない」と回答した方への質問であるので、「情報がない」と回答した人が10/13あり、77%の率になる。情報を必要な人にどう届けるのが課題である。

f) 設問6. 家庭における支援者は誰か(複数回答)

1. 母親	31	38%
2. 父親	21	26%
3. きょうだい	6	7%
4. 祖母	17	21%
5. 祖父	3	4%
6. 親戚	2	3%
7. その他	1	1%

家庭における支援者を考えたとき、父親・母親はその中心になるが、その他の支えを見たときに、祖母と回答する数が17あった。全体の55%である。約半数は祖父母の支援を受けていると考えてよいだろう。しかし、約半数は父親・母親でやりきっていることが考えられ、母親の負担は大きいものと思われる。

g) 設問7. 母親の相談相手は誰か

(3つ以内選択の複数回答)

1. 配偶者	19	22%
2. 祖父母	14	16%

3. 父母のきょうだい	3	3%
4. 子のきょうだい	0	0%
5. 学校園の先生	12	14%
6. 放課後等デイサービス等事業所	7	8%
7. 相談機関	8	9%
8. 主治医	15	17%
9. 友人・知人	10	11%
10. その他	0	0%

「配偶者(22%)」、「主治医(17%)」、「祖父母(16%)」と続き、「学校園の先生(14%)」が続く。保育士、教員は保護者にとっても身近な存在であり、相談できる関係性が築けることが大切であることがわかる。

## 2) 事後アンケート結果

講座終了時に、講座理解に関する自己評価についてアンケート調査を行った。質問項目と結果は次の通りである。(n=20)

設問 1. 子どもの行動を具体的に話すことができるようになったか

設問 2. 子どもの行動を3分割することによって、「行動のきっかけ」と「行動の理由」に気づくようになったか

設問 3. 子どものちょっとした行動でもほめられるようになってきたか

設問 4. 子どもへの伝え方が変わってきたか

a) 設問 1. 子どもの行動を具体的に話すことができるようになったか

1. 具体的に話せるようになった	3	15%
2. だいたい話せるようになった	10	50%
3. 簡単に話してしまうことがある	5	25%
4. 具体的に話すのは難しいと感じる	2	10%

多くの受講者は子どもの行動を具体的に話すことに自信が持てるようになったが、まだ難しいと感じる方もおられる。

b) 設問 2. 子どもの行動を3分割することによって、「行動のきっかけ」と「行動の理由」に気づくようになったか

1. 気づくようになってきた	11	55%
2. 気づくときと気づかない時がある	9	45%
3. 分からない事の方が多い	0	0%

行動を3分割し、機能分析して子どもの行動の理由を考えることは、受講者全員が理解している。先行条件と後続条件の関係が見えてこず、行動の意味が分からないことがある、と答えた方も半数近くいる。これは、行動を観察し、具体的に話せるようになる力が求められる。設問1の結果とも合致する結果とも言える。

c) 設問 3. 子どものちょっとした行動でもほめられるようになってきたか

1. ほめることが多くなってきた	17	85%
2. 努力するが、ほめる機会が少ない	0	0%
3. 努力するが、叱ることの方が多い	1	5%
4. ほめるのは難しいと感じる	2	10%

多くの受講者が、意識的に子どもをほめるようにしていることがうかがえる。まだ、叱ることの方が多いと答える受講者もあり、今後のフォローアップをどうするかを課題である。

d) 設問 4. 子どもへの伝え方が変わってきたか  
(複数回答)

1. 前もって伝えられるようになった	15	28%
2. 具体的に伝えられるようになった	11	20%
3. 短く、一つずつ話せるようになった	6	11%
4. 子どもの注意を引いてから話せるようになった	8	15%
5. 絵や写真を使って話せるようになった	0	0%
6. わかりやすい言葉で話せるようになった	7	13%
7. 事前に約束を伝えるようになった	7	13%

レッスン④「伝え上手になろう」の実践について尋ねた。多くの方が複数回答をしている。「絵や写真を使って話せるようになる」が0%であるのは、準備がすぐには出来ないことも影響しているものと思われる。

## 3) 事後アンケートにおける自由意見

- ・子どもが起こす問題行動には全て原因があったり、それが長く続く場合や怒っても効果がないときには、結果に大きく影響されることが分かり、自分の考え方や行動もそれに対する対策が立てられるようになりました。
- ・受講しはじめて、子どもの暴言がなくなりました。まるで嘘のようです。

- ・今までは困った行動をするとすぐに叱ったりペナルティを与えてきましたが、ほめるポイントを探す！ということを学びました。私にも「こだわり」や「切り替えの悪さ」があるんだなあと実感しました。「まっ、いいか」とゆるく子どもに関われたら、と思います。
- ・今まで相談にも行ったことがなかったので、講座を受けてとても参考になりました。
- ・日々疲れていて何かを指導する気力がなくなりましたが、少しずつ出来る範囲でやってみようと思うことが出来ました。
- ・困ったことはたくさんありますが、子どもをじっくり観察しながら自分自身の気持ちも落ち着かせていい方向に向かうように頑張っていきます。
- ・学んだことはすぐに実践しようと思いい家に帰るのですが、日々の生活に追われ、なかなか子どもと向き合うことができません。

#### 4. 考察

##### 1) 広報のあり方

3つの拠点で行ったPT講座は、どこも定員をほぼ満たした。今回PTを受講された方の4割は初めて学習会等の学びに参加された方であった。また開催情報の入手経路は、第1拠点では保健福祉センターが80%。第2拠点では学校園・放課後等デイサービスなどの事業所からの情報が75%、第3拠点では、SNS・インターネット検索が80%であった。事前アンケート設問5で過去に学習会等の参加をしたことのない方に、参加しなかった理由を訊ねると、約6割は「情報がない」と回答した。

何らかの相談や福祉サービスを受けておられる方はそれなりの情報が入りやすいが、相談やサービス受給にたどりつかないまま困っている保護者にはなかなか情報が届かないようである。行政機関の広報誌に募集を告知する場合も、「催しコーナー」に1度だけ小さく載る程度でなかなか情報を必要とする人に届かない現状があると推測される。

今回、募集定員を大幅に上回った第2拠点の広報は、区の広報誌も活用したが、障がい者地域自立支援協議会子ども部会で告知し、部会参加団体である学校園や施設、福祉サービス事業所から気になる家庭への声かけを行うようにした。そのため、学校園からの紹介で申し込まれるケースが第2拠点では特に多かった。日頃、保護者

が子どものことで相談する相手に「学校園の先生」と答える方が多かったのもポイントである。学校や保育所・幼稚園を情報発信の中継地として活用することが今後検討すべきところである。

##### 2) フォローアップについて

受講理解度・実践力・満足度についてもPT講座終了直後に受講アンケートとして実施した。(n=20)

###### 設問1. 理解度

1. よく理解できた	15	75%
2. まあまあ理解できた	5	25%
3. どちらでもない	0	0%
4. やや難しかった	0	0%
5. 難しかった	0	0%

###### 設問2. 実践力

1. すぐに取り組みそう(もうしている)	6	33%
2. できるところから始めたい	11	55%
3. できるかどうか、自信がない	1	5%
4. まだ難しい課題である	1	5%
5. 継続して指導してもらえたらできそう	1	5%

###### 設問3. 受講満足度

1. 十分満足している	12	60%
2. 満足している	8	40%
3. どちらでもない	0	0%
4. まだ物足りない	0	0%
5. 物足りない	0	0%

受講直後は、理解度・満足度も高く、子どもへのよい関わりを始めてみようと思欲的になるが、事後アンケートの設問3.においても、15%の受講者が、「ほめるが叱ることが多い」「ほめるのは難しい」と答えている。この受講アンケートの設問2.では「実践はまだ難しい」「継続して指導してもらえたらできそう」と答える受講者もいた。自由記述にもあったように、「日常の生活に追われて、なかなか子どもと向き合うことが難しい」「日々疲れていて何か指導する気力がなくなりましたが…」「私にも『こだわり』や『切り替えの悪さ』があるんだなあと実感しました」など、母親自身の悩みを持たれる場合があり、受講者に十分なPTの成果を定着させるにはフォローアップは必要であると感じる。

客観的なデータはないが、3年前に第1拠点で初めて行ったとき、受講者から「フォローアップをして欲しい」という要望

が主催する区社会福祉協議会に複数上がり、終了3ヶ月後と6ヶ月後にフォローアップ座談会を行った。そこでは、上手くいっているケースや上手くいかないケース、新たな課題等が出てきて、参加者で情報共有しながらファシリテーターも助言を行った。保護者はやっていくうちに自信をつけてはいるが、子どもの成長に合わせた新しい課題も出てきて、そのたびに対応に悩む姿が見られた。1度だけのPTで終わらず、フォローアップは必要と感じる。また、個別の相談につなげるケースもあるだろう。場合によっては相談機関への接続も検討することも大切である。

### 3)ファシリテーターの養成について

今回、第2拠点で定員を超過して実施するため一人のファシリテーターだけでは十分に受講者とコミュニケーションが取れないと判断し、ペアレントメンターをサブファシリテーターに置き、グループワークでテーブルを巡回してもらった。メンターの体験談があることで参加者が事例を出しやすくなり、参加者同士で共感できる話題や受けられるサービス情報の交換もでき、次の支援リソースにつながるメリットもあった。しかしながら、受講者の質問に全てを答えることは難しく、グループワークでは筆者ができるだけ全てのテーブルを回るようにした。第2拠点での実施に当たっては、障がい者自立支援協議会子ども部会にもファシリテーター養成も踏まえて、関係職員の見学参加を呼びかけた。数名の参加があったが、「講座の中身については、日頃の保護者支援の参考になった」との意見が多かったが、いざこれを教える側に立つとなると、「技術が未熟で難しい」という意見で占めた。

厚生労働省は、PTに係る事業に対して平成26年度から、都道府県及び指定都市が事業を実施する際に補助を行っている。しかしながら、PT講座を実施する自治体数は、全国で261カ所(平成27年度)と、前年の231カ所から増えてはいるが、まだその数は不足している。(厚生労働省調べ、2017)

予算補助があるのに実施自治体が大きな増加につながらないのには、PTを実施することができるファシリテーターの数が圧倒的に少ない。PT指導が出来る人材の養成が今後の発達障害者支援の課題としている市町村が多い。一方で指導者育成プログラムを独自に開発し、マニュアル化することで質を一定に保つ工夫を行い、指導者育成研修会を都道府県が実施するところも出始めている。

効果が高いPTを実施するために必要な知識として、①ABA、②発達障害児・者の特性と支援、③保護者のストレスと

心理、④PTの運用方法に関する知識が挙げられる。また、必要なスキルでは、①行動支援計画を作成するための情報収集スキル、②収集した情報をもとに行動支援計画を作成するスキル(ABAの知識の応用)、③ファシリテーションスキル、④カウンセリングスキルなどが挙げられる。(宮崎ほか、2016)

ファシリテーターになり得る人としては、特別支援教育・障害児保育に携わる教職員・保育士、特別支援教育を専門とする大学教員、障害児を育てた経験のあるペアレントメンター、臨床心理士・作業療法士・言語訓練士等の障害児療育に関わるセラピスト、障害児施設で勤める児童指導員などが考えられる。これらの方がPT実施に関する知識・スキルを系統的に学ぶためのシステムが確立され、全国的に広がることを願う。

### 参考文献

- (1) 杉山登志郎著(2007):子ども虐待という第四の発達障害,学研プラス
- (2) 厚生労働省編(2017):発達障害者支援関係報告会資料
- (3) 井上雅彦編著(2008):子育てが楽しくなる5つの魔法(改訂版),アスペ・エルデの会出版
- (4) 井上雅彦(2012):自閉症スペクトラム(ASD)へのペアレント・トレーニング(PT),発達障害医学の進歩 24.診断と治療社,30-36
- (5) 井上雅彦(2012):自閉症スペクトラムに対するペアレント・トレーニング,小児の精神と神経 52(4),313-316
- (6) 特定非営利活動法人アスペ・エルデの会(2015):「市町村で実施するペアレントトレーニング」に関する調査について,厚生労働省 平成26年度障害者総合福祉推進事業報告書
- (7) 宮崎光明・加藤永蔵・藤原直子・宮一志(2016):ペアレント・トレーニングを実施するために最低限必要なスキルとは何か? 研修や実施支援の考察,日本LD学会第25回大会自主シンポジウム
- (8) 岩坂英巳(2012):困っている子をほめて育てるペアレント・トレーニングガイドブック,じほう